

No. 265 SEMANARIO DE SÃO PAULO

28-Janeiro-1927

聖 ガ ニ 新報

新任有吉大使を迎えて

駐日佛國大使ボーオル、クロオデル氏は、日本の桃の花を愛した文藝の嗜好者、大和民族藝術の耽溺者であつた。

日本文人仲間に忘れられぬ親しみの記憶を痕して居る。

前任の田代親爺さんは低利資金农を戴いて、獨り泣くが能でない。

八十五万圓を投げ出し去つた。

後任の有吉親父さんに求むる處は、その貸付金を土臺にし増額論述へ、且つ在伯邦人移殖民としての肚をも茲に披瀝する。

前半の大半は、伯國の親爺さんである。

論述へ、且つ在伯邦人移殖民の言葉を當てて、御便益の方は、Banco Commercial do Estado de São Pauloへ御拂込被下り被下度候。

S. Paulo 又は御便益の方は、Banco Noroeste do Estado de São Pauloへ御拂込被下り被下度候。

ノロエスチ線リーンス市九月七日町

(市へ入口の坂下の右側)

ノロエスチ線リーンス市九月七日町</

プロミツソン
瞬星

(四) 淺見哲之助

「さうかい、ハヽヽ、まあ第一が最大の急務だね、だからボツボツと無理をしない様にやる事だ。二人で三千本なんだから、馴れた者なら独身者一人で請負ひる本數が変わつて、それで身體を害はしても大變だからボツ／＼やる方がいいね」

敏雄は、應揚に戸口に立つたまゝ云つた。

静子は茶をわかす爲めに炊事場に行きかけた。

「なアに、他人でもないから世話しなくていいよ、カフェーなら今家で飲んで來たばかりだからかまはないでおいてくれ」

「でも一寸わからして參りますわ姉さんのカフェーと私のカフェーと又味が異ふかも知れませんからお、お、」静子は笑談が斯んなに上手に己が口から出たのが自分で不思議な位であつた。読みかけの婦人公論を机の上に伏せて、ツカツカと彼女の身體を後から力強くグット抱き始めた者があつた。

「聲をたてゝはいけない、静か豫期せざるこの突然の出來事にキヤアと驚怖の余り發さうとした聲が咽で止つてしまつた、聲主は聽き馴れた敏雄の鋭い、然し懶むた聲であつた。

「いけません、兄さん、何を爲さうとなさるのです、此の手を放して下さい、此の手をお願ひだから取つて下さい」

静子は恐ろしさの余りワナ／＼震むる聲を自分で叱りながら努力して見苦しい程震れて居た。彼女が、嚴格なそして日頃の尊敬の的であつた兄の姿は根底から崩された。醜い懲意に燃る瞳と事をして見苦しい程震れて居た。

「さうかい、ハヽヽ、まあ第一が最大の急務だね、だからボツボツと無理をしない様にやる事だ。二人で三千本なんだから、馴れた者なら独身者一人で請負ひる本數が変わつて、それで身體を害はしても大變だからボツ／＼やる方がいいね」

敏雄は、應揚に戸口に立つたまゝ云つた。

静子は茶をわかす爲めに炊事場に行きかけた。

「なアに、他人でもないから世

話しなくていいよ、カフェーなら今家で飲んで來たばかりだからかまはないでおいてくれ」

「でも一寸わからして參りますわ

姉さんのカフェーと私のカフェーと又味が異ふかも知れませんからお、お、」静子は笑談が斯んなに上手に己が口から出たのが自分で不思議な位であつた。読みかけの婦人公論を机の上に伏せて、ツカツカと彼女の身體を後から力強くグット抱き始めた者があつた。

「聲をたてゝはいけない、静か

豫期せざるこの突然の出來事に

キヤアと驚怖の余り發さうとした聲が咽で止つてしまつた、聲主は

聽き馴れた敏雄の鋭い、然し懶むた聲であつた。

「いけません、兄さん、何を爲

さうとなさるのです、此の手を放

して下さい、此の手をお願ひだか

ら取つて下さい」

静子は恐ろしさの余りワナ／＼

震むる聲を自分で叱りながら努力して見苦しい程震れて居た。

彼女が、嚴格なそして日頃の尊敬の的であつた兄の姿は根底から崩された。醜い懲意に燃る瞳と

事をして見苦しい程震れて居た。

「さうかい、ハヽヽ、まあ第一

が最大の急務だね、だからボツボ

ツと無理をしない様にやる事だ。

二人で三千本なんだから、馴れた

者なら独身者一人で請負ひる本數

が変わつて、それで身體を害はしても大變だからボツ／＼やる方がいいね

」

敏雄は、應揚に戸口に立つたまゝ云つた。

静子は茶をわかす爲めに炊事場に行きかけた。

「なアに、他人でもないから世

話しなくていいよ、カフェーなら今家で飲んで來たばかりだからかまはないでおいてくれ」

「でも一寸わからして參りますわ

姉さんのカフェーと私のカフェーと又味が異ふかも知れませんからお、お、」静子は笑談が斯んなに上手に己が口から出たのが自分で不思議な位であつた。読みかけの婦人公論を机の上に伏せて、ツカツカと彼女の身體を後から力強くグット抱き始めた者があつた。

「聲をたてゝはいけない、静か

豫期せざるこの突然の出來事に

キヤアと驚怖の余り發さうとした聲が咽で止つてしまつた、聲主は

聽き馴れた敏雄の鋭い、然し懶むた聲であつた。

「いけません、兄さん、何を爲

さうとなさるのです、此の手を放

して下さい、此の手をお願ひだか

ら取つて下さい」

静子は恐ろしさの余りワナ／＼

震むる聲を自分で叱りながら努力して見苦しい程震れて居た。

彼女が、嚴格なそして日頃の尊

敬の的であつた兄の姿は根底から

崩された。醜い懲意に燃る瞳と

事をして見苦しい程震れて居た。

「さうかい、ハヽヽ、まあ第一

が最大の急務だね、だからボツボ

ツと無理をしない様にやる事だ。

二人で三千本なんだから、馴れた

者なら独身者一人で請負ひる本數

が変わつて、それで身體を害はしても大變だからボツ／＼やる方がいいね

」

敏雄は、應揚に戸口に立つたまゝ云つた。

静子は茶をわかす爲めに炊事場に行きかけた。

「なアに、他人でもないから世

話しなくていいよ、カフェーなら今家で飲んで來たばかりだからかまはないでおいてくれ」

「でも一寸わからして參りますわ

姉さんのカフェーと私のカフェーと又味が異ふかも知れませんからお、お、」静子は笑談が斯んなに上手に己が口から出たのが自分で不思議な位であつた。読みかけの婦人公論を机の上に伏せて、ツカツカと彼女の身體を後から力強くグット抱き始めた者があつた。

「聲をたてゝはいけない、静か

豫期せざるこの突然の出來事に

キヤアと驚怖の余り發さうとした聲が咽で止つてしまつた、聲主は

聽き馴れた敏雄の鋭い、然し懶むた聲であつた。

「いけません、兄さん、何を爲

さうとなさるのです、此の手を放

して下さい、此の手をお願ひだか

ら取つて下さい」

静子は恐ろしさの余りワナ／＼

震むる聲を自分で叱りながら努力して見苦しい程震れて居た。

彼女が、厳格なそして日頃の尊

敬の的であつた兄の姿は根底から

崩された。醜い懲意に燃る瞳と

事をして見苦しい程震れて居た。

「さうかい、ハヽヽ、まあ第一

が最大の急務だね、だからボツボ

ツと無理をしない様にやる事だ。

二人で三千本なんだから、馴れた

者なら独身者一人で請負ひる本數

が変わつて、それで身體を害はしても大變だからボツ／＼やる方がいいね

」

敏雄は、應揚に戸口に立つたまゝ云つた。

静子は茶をわかす爲めに炊事場に行きかけた。

「なアに、他人でもないから世

話しなくていいよ、カフェーなら今家で飲んで來たばかりだからかまはないでおいてくれ」

「でも一寸わからして參りますわ

姉さんのカフェーと私のカフェーと又味が異ふかも知れませんからお、お、」静子は笑談が斯んなに上手に己が口から出たのが自分で不思議な位であつた。読みかけの婦人公論を机の上に伏せて、ツカツカと彼女の身體を後から力強くグット抱き始めた者があつた。

「聲をたてゝはいけない、静か

豫期せざるこの突然の出來事に

キヤアと驚怖の余り發さうとした聲が咽で止つてしまつた、聲主は

聽き馴れた敏雄の鋭い、然し懶むた聲であつた。

「いけません、兄さん、何を爲

さうとなさるのです、此の手を放

して下さい、此の手をお願ひだか

ら取つて下さい」

静子は恐ろしさの余りワナ／＼

震むる聲を自分で叱りながら努力して見苦しい程震れて居た。

彼女が、厳格なそして日頃の尊

敬の的であつた兄の姿は根底から

崩された。醜い懲意に燃る瞳と

事をして見苦しい程震れて居た。

「さうかい、ハヽヽ、まあ第一

が最大の急務だね、だからボツボ

ツと無理をしない様にやる事だ。

二人で三千本なんだから、馴れた

者なら独身者一人で請負ひる本數

が変わつて、それで身體を害はしても大變だからボツ／＼やる方がいいね

」

敏雄は、應揚に戸口に立つたまゝ云つた。

静子は茶をわかす爲めに炊事場に行きかけた。

「なアに、他人でもないから世

話しなくていいよ、カフェーなら今家で飲んで來たばかりだからかまはないでおいてくれ」

「でも一寸わからして參りますわ

姉さんのカフェーと私のカフェーと又味が異ふかも知れませんからお、お、」静子は笑談が斯んなに上手に己が口から出たのが自分で不思議な位であつた。読みかけの婦人公論を机の上に伏せて、ツカツカと彼女の身體を後から力強くグット抱き始めた者があつた。

「聲をたてゝはいけない、静か

豫期せざるこの突然の出來事に

キヤアと驚怖の余り發さうとした聲が咽で止つてしまつた、聲主は

聽き馴れた敏雄の鋭い、然し懶むた聲であつた。

「いけません、兄さん、何を爲

さうとなさるのです、此の手を放

して下さい、此の手をお願ひだか

ら取つて下さい」

静子は恐ろしさの余りワナ／＼

震むる聲を自分で叱りながら努力して見苦しい程震れて居た。

彼女が、厳格なそして日頃の尊

敬の的であつた兄の姿は根底から

崩された。醜い懲意に燃る瞳と

事をして見苦しい程震れて居た。

「さうかい、ハヽヽ、まあ第一

が最大の急務だね、だからボツボ

ツと無理をしない様にやる事だ。

二人で三千本なんだから、馴れた

者なら独身者一人で請負ひる本數

が変わつて、それで身體を害はしても大變だからボツ／＼やる方がいい

ノロエスティ線殖民へ

低利資金の貸出し

一四一 號五十六百二第

SEMANARIO DE SÃO PAULO

日八十二月一年二和昭

廿日から向より三日間、ベンナ驛へ集つたが、同驛はピラジニイ郡管附近驛の債務者へ低利資金が出る云ふので、十九日頃からニコニコ顔で債務者連はベンナ驛へ集つて居たが、廿日はバウル領事館の員は俺の管轄区域の仕事を他郡役員は出張してやるなんて利権者の顔が誰れも見なかつたんで皆が憂鬱な顔で失望して居た。廿一日午前十一時、ベンナ驛着にも証訴手續があると憤慨し出した汽車で待ちあぐんで居る處へばたとあり、又周囲の田舎政治ゴロウの古關書記生と、聖市總領事がその取巻連となつて形勢不穏だ館から原口書記生とが血色のいゝと云ふので、リヌス驛では外人へ顔を見せたで皆大喜び、晝食後午抵當に入つてゐるもののみの抵當後一時頃から副島商店の一室を借りて事務所に當て貸出登記署名を開始した、グアランタン驛の債務者が十二三人署名済みの後平野殖地の債務者佐藤勘七氏の債務者(ピラジュイの登記所公證人とか)がインボスト、デ、タロン、デ、カビタルは何うなつて居るか、法令の示す處では債務期間が四年間であれば四年間前納する條令がある、それはカビタリストが他州居住者であれば、そさせねば、登記公證人は三十ボルセントの罰金に科せられる、此の點は如何の手續をなし居るやと一本横棒を入れたので領事館側も領事館側の公證人も其邊の打合せ用意不充分であつた爲め、大狼狽を始めた由。

結局古關氏丈けで責任を負つて古關氏が通話をして居た處「そんな面倒ならモー貸出しは止めちまう」し、リヌス驛グアイサラ驛の前述と多羅間領事のドラ聲が電話口で皆に響いたとかで債務者側も顔色を變へて何の事だ、怪しからぬと多羅間氏同様短氣を起し領事館も領事館だと激昂した者があるとか翌日朝のミストで原口氏がバウル迄戻り多羅間領事に悉細具陳したので事は早く落着し、其の午後原口氏は又ベンナ行のミストにて出發、廿二日早朝より悲なくベンナ譯貸出しの分は五百數十コントス署名済みになつた。廿四日はリヌス驛にてグアイサ待つた低利資金も出るので何處と晴れたのでもあらうが、又待ちに

情 報

一、バウル領事館着電

二、二月七日及八日は各官廳事務休止並ニ諸學校ノ授業休暇スペキ旨仰せ出サル。

三、葬場殿ノ儀丁ツテ御霊柩ハ鐵道ニヨリ御陵所ニ向ハセ給ヒ八

ヒ葬場殿ノ儀ヲ行ハセラル、諸員拜體ノ儀ハ午後十一時ナルニ付キ遙拜式ヲ舉行スルニ於テハ

此ノ時刻ヲ適當トスベシ。但シ

各地ノ事情ヲ斟酌シ適宜ノ時刻

ヒ取計ヒ差支ナシ。

二、七日午後六時御靈車宮城を御

一、二月七日及八日は各官廳事務休止並ニ諸學校ノ授業休暇スペキ旨仰せ出サル。

三、葬場殿ノ儀丁ツテ御霊柩ハ鐵道ニヨリ御陵所ニ向ハセ給ヒ八

ヒ葬場殿ノ儀ヲ行ハセラル、諸員拜體ノ儀ハ午後十一時ナルニ付キ遙拜式ヲ舉行スルニ於テハ

此ノ時刻ヲ適當トスベシ。但シ

各地ノ事情ヲ斟酌シ適宜ノ時刻

お丹はお峯に宛てた文を認めた
お大の真心の常ならぬ事、お大に
過失はあつたにせよ、此度の手柄
に免じて原の御縁を結ばれたき事
それが平左衛門殿看病の上にも一
方ならぬ便宜となる事、その外に
も細々と執成の詞を書いて、お大
に渡した。
お大は歡び受けて辞し歸らうと
した、日が落ちて比叡下しの北風
が吹き盛る、幸七はまだ待つて居
た。
お丹はお大の爲めに茶をたて、
勧めなどした、赤穂へ歸りなば斯
うちもせ、あいもせと心付けもした
其處へ内が歸つて來た、幸右衛
門も歸つて來た、お丹はお大を
紹介した、お大はくどくと挨拶
した、十内は酔つてゐた、幸右衛
門も酒氣があつた。
「平左衛門お家内か、よくまら
れた」と内は呂律も廻らぬ舌で
云つた。
「今日の御評議何事でござります
したな」
お丹は良人も養子も、評議の内
容について一言も實を云はぬと知
りながら、何時も同じやうに聞い
て見た、十内はけりりとして
「お大どの赤穂へお歸りとござ
ったな」
お丹は良人も養子も、島原の繁昌
の種、伏見墨染の夜景色も目覺
しには重い荷がござります」
御評議の御模様は分りませぬ
が、今日のお寄合ひ、お終ひにな
つたことは知れた、お陸様にお願
ひなされませ、お陸様のお文はお
峯との対し大きな力になります
る」
お大は別れを告げて出た、山科
へ歸つたのは早日の暮れた時であ
つた、お陸はお大が留守の間に書
いた文を書いておいた、明後日で
あるから朝早く出でる。



女忠臣藏

(六十八)

碧瑠璃園

のやうな目に何故神様のお宿りはないであらうの
「前世の劫と諦める外ござります」
「御家中は數あれど、此方ほど
の劫を持つたお方はない、不忠義
の大野殿さへ盲目になられた噂は
底は玉の様に清うござります、こ
の心、やがて目の中にも映らぬと
あるまいかと……」

平左衛門は幾度も眼瞼を拭つて

見る、目前に黒雲の漲るやうな
山にも海にも霞棚引け、野にも庭にも音色のいゝ小鳥訪れる、春の
山にも海